

パル動物病院

～人と動物の絆～

よりよい関係を目指して

私たちは最先端の診療技術を生かし、地域に密着した動物病院を目標にしております。

◆ 裾野センター病院

静岡県裾野市伊豆島田 843-5

TEL **055-993-3135**

◆ 沼津病院

静岡県沼津市沼北町 1 丁目 5-27

TEL **055-922-6255**

●●●●● 診療時間 ●●●●●

受付時間

◆ 裾野センター病院

全日	午前	9:00 ~ 11:30
	午後	14:00 ~ 18:30

◆ 沼津病院

平日	午前	9:00 ~ 11:30
	午後	14:00 ~ 18:30
日	午前	9:00 ~ 11:30
木・祝日	休診	

●● パルニュース 2026 年 8 月号 ●●

- ◆ 猫の高血圧性網膜症について
- ◆ 犬猫の異物誤食と処置について

●●●●● 専門科診療 ●●●●●

当院では、下記の専門診療をおこなっております。ご希望の方は事前にご予約ください。

◆ 口腔科

奥田 綾子 先生 博士 (歯学)

◆ エキゾチックペット科

霍野 晋吉 先生 博士 (獣医学)

◆ 皮膚科

関口 麻衣子 先生 博士 (獣医学)

◆ 行動治療科

フリッツ 吉川 綾 先生 博士 (獣医学)

◆ 眼科

当院 小野 啓 博士 (獣医学)
当院 都能 敏順

●●●● ウェブサイト ●●●●



pal-ah.jp

猫の高血圧性網膜症^{もうまくしょう}について

高血圧性網膜症は、全身の血圧が高い状態が続くことで目の奥にある網膜に障害が発生し、突然の視覚低下や失明を引き起こす病気です。特に中高齢の猫で多くみられ、高血圧自体には目立った症状がないため、異変に気付いた時にはすでに視覚が大きく低下していることも少なくありません。

網膜は、目に入った光を感じ取り、その情報を脳へ伝える重要な組織です。高血圧になると網膜の細い血管に強い負担がかかり、出血やむくみ^{もうまくはくり}、網膜剥離などが起こります。その結果、突然見えなくなったり、瞳孔が開いたままになったりすることがあります。

【原因】

猫の高血圧の多くは、他の病気に伴って起こる「二次性高血圧^{こうじょうせんきのうこうしんしょう}」です。特に慢性腎臓病や甲状腺機能亢進症で多くみられます。一方で、明らかな原因が見つからない「特発性高血圧^{とくはつせい}」と診断される場合もあります。

【症状】

初期にはほとんど症状がありませんが、進行するとある日突然物にぶつかる、段差を踏み外す、瞳孔が大きく開いたままになるなどの視覚異常がみられます。眼底検査では網膜出血や網膜剥離がみられ、失明に至ることもあります。また、高血圧

は目だけでなく、脳や心臓、腎臓にも悪影響を及ぼし、神経症状や腎機能の悪化を引き起こすことがあります。

【診断】

診断には血圧測定が最も重要です。また、眼科検査を行い、網膜出血や網膜剥離の有無を確認します。

同時に、血液検査や尿検査、超音波検査を実施し、慢性腎臓病や甲状腺機能亢進症など、高血圧の原因となる基礎疾患がないかを調べます。

【治療】

治療の基本は降圧薬によって血圧を下げることです。同時に、慢性腎臓病や甲状腺機能亢進症などの基礎疾患がある場合は、その治療も並行して行います。網膜剥離が起きていても、早期に血圧を正常化できれば視覚が回復する可能性があります。治療開始が遅れると視覚の回復が難しくなります。

高血圧は「見えない病気」ともいわれ、自宅で気付くことが難しい病気です。特に7歳以上の猫や慢性腎臓病、甲状腺機能亢進症と診断されている猫では、定期的な血圧測定が早期発見につながります。突然見えなくなることを防ぐためにも、健康診断の際には血圧測定について獣医師にお問い合わせください。

犬猫の異物誤食と処置について

犬猫が食べ物以外のものを飲み込んでしまう「異物誤食」は、特に若い動物に多く見られます。消化管異物の摘出手術は、若い犬猫では最も多い外科手術のひとつであり、決して他人事ではありません。「少し様子を見ようかな」という判断が、取り返しのつかない事態につながることもあるため、早急な受診が大切です。

よくある誤食異物

おもちゃの部品・靴下や下着などの布類・ひも・輪ゴム・骨や串・ボタン電池・硬貨・果物の種など、身近なものが原因になります。特にひも状異物（糸・ストッキングなど）は腸に絡まりやすく、緊急の対応が必要になることもあるので注意が必要です。

検査

来院後は、異物がどこにあるかを画像検査で確認します。金属・硬貨・骨など、X線を通しにくい異物はX線検査で確認できます。布・ゴム・プラスチックなどX線に写りにくい異物の場合は、超音波検査も併用します。異物の種類・大きさ・現在の位置を把握することで、催吐処置、内視鏡、外科手術のどの方法が最適かを判断します。

催吐処置

異物を飲み込んだ2-3時間以内であれば、まず「催吐（さいと、意図的に嘔吐させる処置）」を検討します。

犬の場合、異物がまだ胃の中にある段階であれば、点眼式の催吐剤を用いた催吐処置が比較的高い成功率を収めています。一方、猫は催吐処置の成功率が低く、確実に吐き出させることが難しいため、早めに次の処置へ移行します。

ただし、串・鳥の骨・針などの尖った異物は、吐かせる際に食道や胃を傷つける恐れがあるため、催吐処置はできません。

催吐で取り出せない場合の処置

催吐が適応外、または催吐を試みても取り出せなかった場合は、全身

麻酔下での処置に進みます。異物の位置や種類に合わせて以下の処置を検討します。

- ①内視鏡による摘出：胃や食道にある異物は、手術をせずに内視鏡で取り出せる場合があります。体への負担が最も少ない方法です
- ②胃切開による摘出：内視鏡で取り出せない胃内異物や、異物が腸へ進んでしまった場合でも、可能であれば腸まで到達した異物を胃内に押し戻し、胃を切開して取り出す方法が選択されます。腸を切るよりも感染や縫合不全のリスクが低い方法です
- ③腸切開による摘出：胃への押し戻しが困難な場合は、腸を切開して異物を直接取り出します
- ④腸切除・吻合：異物によって腸が壊死している場合は、壊死した腸管を切除し、残った腸をつなぎ合わせる手術（吻合）が必要になります。

早めの受診が処置の選択肢を広げます

誤食からの時間が短いほど、体への負担が少ない方法で対処できる可能性が高まります。「食べたかもしれない」という段階でも、迷わずご来院ください。また、誤食したものの種類・大きさ・量・時間がわかると診察の大きな助けになりますので、可能であれば食べ残した現物やメモ・写真をお持ちください。

気になることがあれば、遠慮なく獣医師にご相談ください。

参考文献

『ロジックで攻める初心者のための小動物実践外科学』